

# 健康教育

|                         |    |
|-------------------------|----|
| ☆ 黒江の健康教育               | 2  |
| ☆ 「日本一」へのあしどり           | 4  |
| ☆ 養護教諭一年をふりかえって         | 6  |
| ☆ 「日本一の健康優良児は一日では生まれない」 | 7  |
| ☆ 日本一健康優良児を出して          | 9  |
| ☆ 健康優良児日本一中村恭子          | 10 |
| ☆ 子どもと共に                | 12 |
| ☆ 恭子を育てて                | 13 |
| ☆ 仏・伊のこどもたち             | 14 |
| ☆ 給食時における保健指導はいかにあるべきか  | 16 |
| ☆ 本校保健教育のあゆみ            | 17 |
| ☆ 「骨の強い子に育てよう」          | 20 |
| ☆ 体位の向上、体質の改善は学校給食から    | 21 |

こども大使仏・伊訪問出発の日に

(朝日新聞社提供)



山本校長  
同夫人

坂手校長  
同夫人

中村さんと  
ご両親

金田君と  
ご両親

竹内元春団長  
(東京歯大教授)

No 38



## 黒江の健康教育

和歌山県海南市立黒江小学校長

山 本 史 郎

### I “くろえ”の素描

当校は、和歌山県海南市船尾 236 の 4 番地にある。紀勢本線海南駅で下車し、駅前始発の電車に乗れば、約 5 分で黒江停留所に着く。学校はここから 30 メートルばかりの近さにある。児童数は 1012、学級数は 26 である。

学区は、古くから「黒江塗」をもって知られている漆器の町である。戸数は 3,500、人口 15,000。漆器産業は、約 400 年前からこの地に伝承されたもので、住民は漆器とともに盛衰を重ねてきたといっても敢えて過言ではない。10 年前の 70 % に比べれば、いちじるしく減少したとはいえ、いまなお 40 % の住民がこの生産にたずさわっている。

### II 健康教育への願い

戦後の教育は個人のための教育である。個人の尊厳性は何物にも優先し、したがって教育の場においても、個人の幸福の追求がつねに考えられねばならぬ問題となった。

当時の本校職員は、まず児童の健康なからだづくりが最緊要であることを認め、必然的に保健教育振興の重要性を感じた。昭 29 の研究物、「強い子をめざして」のなかにこう記されている。

#### ・町なみ

町の北端に連なる船尾山の上から見下ろした黒江の町は屋根、屋根、屋根の連続である。せまい地域に人家が密集していて、新任の教員が子どもの家を訪ねて町中に出ると、再び学校へ帰る道を見つけたすのにひと苦勞であり、同じ家を二度めに訪問するときには、また改めて案内者を要するのである。このことは、せまい迷路のような道と密集する家とのようすを最もよくあらわしている事例であって、こうした道と家は必然的に一軒一軒の採光や通風等の条件を非常に悪くしている。

#### ・職業と家屋

前項に述べたとおり、町なみと家の密集からくる通風採光の悪さに拍車をかけるのは家の構造である。漆の固まるのは水分を発散して乾燥するからではなく、空気中の水分を吸収するからであり、さらに気温が高いとその作用が早められるのである。この漆の特性から、当然家屋構造が制約をうけるのである。天井を低くし、通風をさえぎり、高温多湿にするのであるから、どの角度からみても健康的ではない。また、漆器の材料の体積が大きいため、その置き場所に広い空間を必要とする。そのことと家の密集とで、家庭には植樹の余地がほとんどない。環境のこうした事実、子どもの健康に大きい関連をもっていることはいうまでもない。

#### ・生活の状態

職人町黒江は、経済的にも恵まれなかった。問屋や大手筋の製造家は比較的豊かな暮らしをしているが、大部分はかなりぎりぎりの生活をしているのである。朝、洗顔もせずに登校してくる子が全体の 5 分の 1、タオル共用が 2 分の 1、冬季は昼間の服装のまま万年床にもぐりこみ、夏季ははだかで就寝する。トラホーム患者が 20 % をオーバーする。

食生活では、貧困と栄養知識の低さから、いわゆる「紀州の茶がゆ」に依存し、わずかに空腹を満たせばよいと考えられている。

#### ・健康への関心

以上の生活がもたらす健康面でのマイナスを例示すると、戦前の徴兵検査では甲種合格者の県下最低の町村は、わが黒江であったと年輩の人が話す。結核、トラホーム、虚弱体等さらには学童の胸囲のいちじるしい劣勢。しかし学区民の大多数は、むしろ、トラホーム、神経症でさえ、病気とはうけとらないという状態であった。

### Ⅲ “健やかな子”をめざして

#### A 初期のとり組み前

前項に述べた当校児童や学区民の劣勢を挽回するために、昭29年度、その第一歩をふみ出した。教育目標に『民主的で強い子ども』を掲げ、地域とこどもとに必然的に手を尽くさねばならぬ保健体育の研究にとりかかった。しかし当時は保健は体育科の一分野としておさえられ、したがってその指導も、せいぜい保健的習慣形成の域を脱しなかった。

一方体育は、グループ学習を中心として進められ、胸囲をひろめることの努力に焦点をすえた。自校体操黒江体操を業間体操として毎日実施したり、体育時間内には必ず5分間以上の鉄棒運動を加えたり、体育用具の充実による正課時間内での運動量の増大をはかった。

昭33年11月には『健康白書』を出して地域全体の活動をもちあげるべく第一歩をふみ出している。

#### B 中期のとり組み

昭34年度から37年度までの4カ年を中期とおさえた。

児童の体位は向上してきて、全国的レベルに到達した。それにはさまざまな要因があるであろう。県下でいち早く完全給食を実施したこと、保健体育面でのためめ努力、保健委員会、P.T.A.等の指導による学区民の生活の合理化等、とにかくいろんな条件の複合がもたらした喜ばしい傾向といえよう。その間において、とくに校医団の適切な指導が、当校の教育施策と完全にタイアップしてきたことが特筆すべきであろうと思う。

中期における特異性は、学校保健が単に学校のらち内で推進されたのではなく、それが地域保健のなかにおいてその機能を果たすべく方向づけられはじめたという点にある。

そのために保健モデル地区を設け、ここを舞台として、学校や保健委員会が意図する保健上のさまざまな実験、測定、予防、調査等を実施した。その結果得たデータはすべて保健委員会と学校の2つのパイプをとおして、全校、全地域に流され、保健意識と習慣の向上に役立てられたのである。

また教職員の研修面では、この期から研究テーマを『健康教育』の一本にしぼり、『自主的に自分のからだを育てる子ども』をスローガンに、保健体育を軸とした健康教育にとり組んだ。体育面では自主性と指導性のあり方を追求する研究を、保健面では保健学習のあり方の研究を重点的にとりあげた。

なお、昭37年度には、初めて県一の健康優良学校に選ばれ

ている。

#### C 後期のとり組み

この期のはじめ、保健教育上、われわれは重要な開眼がなされた。すなわち、保健教育の今日的内容は単なる保健体育を対象とする教育ではなく、全人教育そのものであるということであった。したがって、小学校教育の要請する四領域の教育内容が、もっともバランスのとれた形で、しかも最高度の実感させられていなければならぬということである。

これまでは保健体育の研究を中軸として、そこから発生する問題を教育全般のなかに止揚して、円満な人間形成をめざしてきた。その歩みは決して誤っていたとは思わないし、それなりの効果はあげてきたが、歩みは遅々としていたのである。

ところで、学校保健は地域保健のなかでその機能を果たすべきであることは前述のとおりであるが、その考え方を全面的に実践に移したのは昭38年度からである。これまでの保健モデル地区を発展的に解消した。改めて学区内33の全町区ごとに毎月一回の地区懇談会をもつことにして、それを健康教育推進のための基盤としたのである。

方法としては、まず、学校が地区懇談週間を設定する。各町区では、その週中の希望目的と開催の場所を決めて学校へ連絡する。この会の出席者は、町区内父兄、地区委員（5名のうち1名は保健委員で、学校保健委員会のメンバーでもある）町区担当のP.T.A.幹部役員、町区担任教員、児童委員会の代表児童たちである。

いったいわれわれ教師は、担任児童を指導し、学級父兄に協力を依頼すれば、それだけでのぞましい家庭生活なり、校外生活なりが営まれているであろうと考えがちである。だがそれは、しゅせん錯覚に過ぎない。現実には、親子も、決してわれわれの希望的観測に沿った生活を展開してくれるものではない。というのが私の主張であって、そこに地区懇談会の意義がある。地区懇談で協議され決定された事項は、いわば組織対組織の約束事である。担任対子ども個人、担任対父兄個人という関係に比べて、約束事を実践に移す段階では、はるかに強大な拘束力をもつのである。このことが、当校保健教育の画期的な前進のために、重要な役割を果たしたのであることは、いうまでもない。

以上、当校が、健康教育にとり組むにいたった必然性と、そのとり組みの概要を申し述べて、諸賢のご批判に供する次第である。



## 「日本一」へのあしどり

岡山県苫田郡芳野小学校長

坂 手 一 郎

### はじめに

本校は、岡山県の北部津山盆地の中にあって、児島高德が十字の詩を書いたということで知られている院庄から近い。国鉄津山駅からバスで25分のところにある。地域は米麦を主とする農業地帯で特産品の無い平凡な村である。古くから教育に対する関心は高く、町内では最も文化水準が高い。明治5年学制頒布と同時に学校が設けられ、95年の歴史と伝統をもっている。

児童数 270名、学級数9（内特殊学級1）教員数12名の小規模校である。

### 1. 健康教育へのあしがかり

本校の教育目標を設定するに当って、教育基本法に示されている「心身ともに健康な国民の育成」という究極目標に従って、健康を目標の中心におき、「人間としてたくましい人間」づくりにしぼって、具体的な計画をたてたのである。

昭和30年度、はからずも学校保健の研究校に指定され、その具体的な展開の機会を得たのである。もちろん、健康優良学校ということは念頭になかった。

寄生虫の保卵者は60%を超えていたし、保健室もなく、保健委員会も組織されていなかった。給食も週3回のミルク給食に過ぎない状態であった。したがって、手をつけなければならないことが山積していた。

まず、学校保健委員会を開いて、手近な問題から処理していくことにし、「健康習慣の形成」という問題にとりくんだのである。

9月に、松山市で開催された、中国四国学校保健研究協議会に参加して、さまざまな示唆を得ることができた。発育の成長記録を写真によって行なう方法も、このときの収穫であった。早速このことを実行に移した。と同時に独自の健康手帳を考案したのである。

藤本校医の指導で保健室も一応整備することができた。ま

た、PTAの奉仕作業によって、殺風景であった玄関前にロータリーの庭ができあがった。

1月には、教職員の研究成果をまとめて学校保健研究会を開き、その成果を発表することができた。本校の健康教育の充実、これをあしがかりとして累積をはじめたのである。

### 2. 県一位健康優良学校になるまで

健康の増進をはかるためには、運動と栄養を欠かしてはならない。体育は一つの柱であった。昭和31年度から3年間にわたって、その研究と実せんを積みあげ、研究成果を毎年発表して、批判を得る機会をもったのである。体育設備も充実し、体育行事も多様化した。昭和32年度、完全給食を実施する計画を進め、PTAはじめ区内の強い支持を得て、県北では最も充実した設備を整えた給食調理場を新設することができた。これを機会として昭和33年度には、県指定の学校給食研究会を開くことになった。保健管理、保健指導とともに給食指導の徹底に努力した。職員の創意による『給食ごよみ』は、指導のための手がかりとして役立った。

当時、う歯の漸増が目立ち、学校保健委員会でも、しばしば討議の材料となった。う歯の予防については、砂糖の消費量に関係があることに着目し、『菓子半減運動』を提唱することになった。また、歯みがきについては『歯そうじ』でなければならないと椋代齒科校医が強調され、食後の歯みがきの重要さが理解されるようになった。子どもたちは、自発的に給食後の歯みがきをはじめた。手洗いの習慣もどうやら身についてきたようである。学校給食によって偏食が減り、残菜はほとんど無い状態になった。昭和31年度から3年間連続して岡山県健康優良学校に選ばれた。

昭和34年は、学校創立88周年に当たっていた。記念事業として水泳プールをつくることになった。近郷に見られない施設設備をもつ設計がなされて、9月には着工の運びとなった。翌年5月完成し、年々泳力も向上し、低学年から水に親しみ皆泳の弱が挙がってきた。このころ、精神衛生の立場から、精神薄弱児の教育に全職員の関心が集まり、特殊学級の設置

について研究を進めた。県北には僅か3校に特殊学級が置かれているに過ぎなかった。遂に昭和35年度から特殊学級を開設する運びとなり、12名の入級者を得て、苦悩の中に光明を見出だすまでに、子どもたちは成長していった。昭和41年度には県1位健康優良学校に選ばれ、引き続き35年度、36年度も県1位となった。

### 3. 特選健康優良学校に選ばれる

昭和36年度、第2学期がはじまると間もなく、中央審査委員による健康優良学校の実地審査が行われることについて通知が届いた。岡山県でははじめてのことで、いこうに様子がわからない。実地審査校に選ばれるとは思ってもかけないことであった。どう対処し、どのような準備を整えるかについて戸惑ったのである。9月26日、富山市で開かれた全国学校給食研究協議大会の席上、本校は文部大臣表彰を受けた。その翌日が実地審査であった。午前7時半から午後4時にわたり日程のつまった、教育の全領域にわたる厳しい審査であった。穴だらけの実態に強い反省の示唆が与えられた。その日の学校保健委員会で夜の歯みがきが問題になった。夜の歯みがきの重要さは理解していながら、実施率はわずか16%にすぎなかった。その理由について、子どもたちの発言は重要な意義をもっていた。『夜はねむい』『夜は暗いのでこわい』『家の人は誰もみがかない』夜の歯みがきをする家の環境がその実施を阻んでいるのである。家中の協力が必要であることが明らかにされた。このことは、今後の大きな課題となった。ともあれ、県下で初めて特選健康優良学校に選ばれたのである。

### 4. 内面化をめざした3年間

実地審査の反省から、子どもたちの知的理解が生活の実践場面に定着する道を開くことに迫られた。何回かの討議の結果、親子の話し合いを部落でもち、家族ぐるみの実践活動にもっていくことになった。いわゆる『親子会議』が2年間に全部落に生まれ、親子の話し合いの結果が、家庭の生活を変えていった。夜の歯みがきも家中みんなのものになった。家庭での尊い実践記録も報告されてきた。生活を高めていくための子どもの研究発表会も年2回ずつ行なわれるようになった。

学校の環境も整備されていった。大林保健主事の努力がみのって、前庭に年中美しい花が咲き乱れ、中庭は、PTAの奉仕作業によって明るい芝生に変わった。危険に傾いた東校舎が、町当局の適切な措置によって運動場南端に改築されたのは昭和38年度であった。39年度、40年度には、残りの教室の整備が進んだ。教室も塗装され、蛍光灯も増設されて、学習環境は面目を一新したのである。

昭和39年11月、金沢市で開かれた全国学校保健大会で、本校学校保健委員会は文部大臣から表彰された。

昭和40年度、健康教育十年の歩みを、全職員で分担し『調和的人間形成をめざして』という冊子を編集する。このことは、過去10年の歩みを深く反省検討することにもなり、今後の歩みの指標にもなった。

### 5. 栄光の日本一

PTA活動も軌道に乗り、家庭教育も充実してきた。親子会議、学級別懇談会をかなめとして、家庭における生活指導の方法に目が向けられ、『家庭教育ごよみ』を生むことになった。41年度には全家庭に配布され、親子会議や学校保健委員会の議題にもとりあげられた。その内容から、部落内の各家庭の勉強部屋の照度測定に回られたPTA委員や、勉強部屋の改造を思いついた父親もあった。8月には、本校PTAは全国表彰を受けた。

10月4日、再度の中央審査委員による実地審査が行なわれた。日程は一そう充実していた。しかし、ゆとりがあった。子どもたちも落ちついていたし、親も教師もあわてていなかった。子どもたちは、はりきって審査を受けた。はっきりものをいう子に育っていて、校内は静かさの中に燃えるものがあつた。結局は、子どもたちの目が、ことばが、そしてその動きが日本一という評価の鍵となったのである。

### おわりに

保健管理指導や組織活動もたいせつである。しかし、もっとたいせつなことは、教育の全面にわたって、むらなく、むだなく、むりなく充実した教育といわれるのもそれである。

学校医、学校歯科医、学校薬剤師、保健主事、養護教諭の努力も大きかった。しかし、直接子どもに接して教育をしてきた学級担任や両親の力がより重要な役割を果たしたことを忘れてはならない。

日本一という名をいただいたが、決してそれが頂上ではない。一つの過程であって、期待は無限であり、真の日本一に接近するためには、今後も平凡で、地道な努力を積みあげていきたいものである。



表彰式に謝辞を述べる坂手校長



# 養護教諭一年をふりかえって

岡山県苫田郡芳野小学校

養護教諭 草 野 睦 子



四月、家を離れて県北の芳野小学校に単身赴任して来たときは、正直いって社会のスタートラインに立った緊張と異郷に住む不安とで、希望や自信に満ちたスタートといったところはみじんもなかった。私は与えられなければ手を出さないとといった消極的な面があって、学校を卒業するときにつくづく「何事も積極的にやろう」と決心したのだが、この調子だと初志貫徹はむづかしいかと、初めからひっこみ思案になってしまっていた。

岡山県は教育県だといわれ、自他共にそれを認めてはいるが、一般行政のうえだけでなく教育行政のうえにも、何かにつけ南厚北薄といって県南に主力がそそがれていることが多かった。また自然環境からみても県北は恵まれていない。けれども芳野小学校は、過去に健康優良学校全国特選校として表彰されたこともあるし、小規模校としては常に県一を誇っているという実績もある。決して県南に劣らず、養護教諭一年生の私には最適の職場であるにちがいない、心機一転してやらなければと反省した。

無我夢中で何をやったか覚えてもないが、一学期は終り、夏休み中に、芳野小学校が県一位健康優良学校に決定したことを知った。これで中央の審査を受ける資格ができたわけだが、今年、まさか全国の五指に数えられ、われわれの作成した報告書が中央の書類審査にパスして、実地審査が受けられ

ようとは思ってもいなかった。もっとも、坂手校長はじめ、十何年来芳野小学校の学校保健につくしてきた人たちにとっては当然待ち望んでいたできごとと相違ない。

実地審査に中央から訪問するという正式な通知があったのがその2週間前、いくら地のままを見てもらうのがいいといつも、やはりすべて最良の状態でのぞみたい。この2週間校内はもとより父兄、地域の人たちの間にははりつめ

た空気が流れた。念願だった日本一の栄冠が獲得できるかもしれない。道路べりの草かりは婦人会の人たちの手で、講堂のいすみがきは父兄たちの手で、そして芝かりと腰板のクレオソート塗りはもっぱら校長、学級担任は各々の学級整備とだれにいわれることもなく分担は決って、皆黙々とやった。

この間養護教諭の私は、学校保健管理者の一人で、皆を指導する立場にあるはずなのに、未整理の帳簿に明けくれ、今になって統計の数字の誤りを発見したり、校内巡視で終日過したりのとんまな日々を重ねて貴重な時間を費したこともあった。保健主事、養護教諭、三師と審査員との、一時間半にわたる面接に臨む場面を想えば、緊張と焦燥で全く気持ちが地につかない。

10月4日、実地審査の当日、子どもたちは案外のものびりしていた様子で、「芳野の子は非常にのびのびしていて、児童心理の発達段階にぴったりそっている」と、しきりに審査員の先生方を感じさせていた。芳野小学校には、これといった欠点もないかわりに、特にこの事が優れているといった特徴もない。この日審査員の先生が、一日の日程の中から、どれほどの「桃太郎づくり」の成果をくみとってくださるのか心配だったから、このことばは本当にわれわれの待ち望んでいたものだった。私どもの面接も、思ったよりもはるかにスムーズに運び、11月3日には、小規模校日本一健康優良学校に決定した。このことは、校長をはじめ学校内外の関係者の十何年来の努力と結束の賜であって、たった半年ほどの私の仕事などは問題にもならない。

このことで芳野小学校は全国的にも有名になったが、その後参観者が多く、時には経験の浅い私には答えられない熱心な質問にとまどったり、時にはその無責任さにあきれたりすることも多い。

執務が軌道に乗ったのは三学期に入ってからで、近ごろやっと芳野小学校の養護教諭の座に落ち着いたようである。毎朝子どもの顔を見て「ああ、きょうはこの子は元気そうだな」「顔色が悪いな、調子が悪いのでは」などと感じるゆとりができて毎日にはりあいがあがる。日本一健康優良学校の養護教諭としての誇りを持つと同時に、この一年間の足跡を謙虚に反省して2年目にのぞみたい。





## 「日本一の健康優良児は 一日では生まれない」

東京都杉並区立東田小学校長

石 岡 信

### 1. 地域的特色

本校は、東京都23区の西端、山の手住宅街に属し、杉並区のはほぼ中央に位置する。密集した住宅地域が大部分で、父母の多くは関東大震災後、とくに終戦後の居住者が多く、ほとんどが中産サラリーマン階層、それもインテリ層の多い地域である。また銀行、会社員も多く転勤による地方との交流がかなりある。

教育に対する関心度はきわめて高く、時には文句も出るが、学校の教育方針には協力的である。とくに最近では職員の研究熱が高まり、授業研究を盛んに行ない、指導力の進歩目ざましいものがあるので、学校への信頼度をまし、学校の教育方針もかなりまで浸透しているものと考ええる。

児童の素質は良い方で、知能も高く、学校のきまりをよくまもり、寝に手をやくことも少ない。注意しなくとも紙くずなどどちらかっていることはほとんどないし、花だんなども荒されたことはなく「誇りのもてる学校づくり」によく協力している。

児童の体位的特色をみれば、杉並区は身長の方に胸囲がせまく、運動能力にねばり強さが不足している。過保護の結果とも考えられる。

### 2. 学校の教育方針

過保護の傾向が強いため、児童は依頼心強く、素直ではあるが積極性やねばり強さが不足している。したがって本校では「意欲的人間」を旨とし「自らの力で伸びようとする子ども」を育てようとしている。

本校では、教育目標の観点で体、心、手、頭と4H主義にヒントをとり、まず健康安全と活動力を重視し、心情、技術、知性を高めることを目標としている。

また、とくに体育が盛んだというわけではないが、何にしても「体づくり」が教育の基盤であると考えるので運動だけ

でなく栄養と休養に関心をもち、偏食矯正や睡眠に留意し、ひとりひとりの児童の発育を促進し、矯正体育、予防教育を重視して指導にあたっている。

生活指導面においては、何よりも「良心的な子」を育て「自分で気づき実行する子」「骨惜しみをしない子」を育てたいと考えている。

昭和41年度の指導の重点をあげれば、次のようである。

#### 学習指導の重点

- (1) 発表力を伸ばす学習指導
- (2) 学習意欲をたかめる環境経営

#### 生活指導の重点

- (1) 明るい学級・学校づくり
- (2) 健康・安全生活の実践

とくに本年は杉並区の研究指定校であったので学級経営を基盤とし、「発表力を伸ばす学習指導」——とくに「気づく」ことを中心として——国語・社会・算数・理科・道徳ととり組み、子どもの主体的学習、集団思考、カウンセリングの問題についての授業研究を真剣につづけてきたのであるが、来年度は、体育をも含めて研究していきたいと考えている。

何にしても、教育観の統一ということが大切であると考え。学校の教育方針を確立し、教員はもちろん用務員・作業員・学童擁護員・警備員とすべての学校に働くものの一致協力教育体制なしには、よい子どもは育たないであろう。

### 3. 学級担任 永田秋男先生

金高君の担任 永田秋男先生は、本年34歳、情熱と実行の人である。どの教科でもすばらしい授業をするが、とくに体育なかでも水泳はキ印のつくほどである。東田中学校の水泳は、日本全国になりひびいているが、現在水泳クラブの指導にあたっているのはこの人である。

時実利彦先生が「脳の話」(岩波新書)で、体力・気力・

知力の三つの力の相関を脳生理学の立場から明らかにし、その重要性を強調しているが、永田先生はまさにその実現者といっていよいであろう。

永田先生は、かつて出身地の静岡県で健康優良児として表彰されている。その立場から子どもたちの指導にあたってきたのであるが、日本一は一日にして生れるものでないと考え

#### 4. 金高雅仁君

永田先生は金高君について次のように語っている。

「金高君は、何事をやるにしても負けない体力をもち、そしてきびしい中に自らとびこんでいく気力をもち、一度決心したことは、あくまでも続けて努力するというめぐまれた人間です。

その上、すなおで明るく、毎日の生活を規則正しく送っているようです。日記を毎日つけて生活を反省しており、つねに昨日よりも今日、今日よりもあしたと希望をもって生活しています。

また友人関係もよく、ユーモアもあり、つねに他人の立場を考えて生活しています。

健康にも気を配り積極的に健康を増進する態度で、毎日必ず鉄棒をしたりしていました。自分で自分の健康管理をし、自分自身をきびしく生きて、より強い人間になろうというように毎日の生活からうかがえます。

どの先生から何を頼まれてもいやな顔ひとつせず必ずやりとげ、ほめられています。気象観測の継続的研究、水泳練習サッカー教室でもキャプテンとしてがんばってきました。

優良児の審査会の前日にも、継続的にやらねばならない研究はもちろん、友人との約束その他、自分がやらねばならないものは、必ず果たし、つねにふだんのままの態度で審査会にのぞんでいました。

努力すれば必ず実るんだという信念をもって、つねに活動的に送っています」といっている。

わたしの観察もまさにその通りで、つけ加えるところはないと考える。家庭における教育も、素質も立派であるが、永田先生の指導力もすばらしいものがあると考え

以上簡略に記したのであるが、学校の教育方針永田先生の指導力、本人の意欲、家庭の教育方針等の統合の結果が、日本一の健康優良児を生んだものといっていよいであろう。

金高君も今後ますます体力、気力、知力の三の力を鍛えて意欲的に人世をきづいていかれることを念願する。

#### 「こども大使」の訪欧

日本の1千万の小学生、2万3千の小学校を代表して、小学生の目であるがままの海外事情をフランス、イタリア両国について見聞し、現場の教育者の目で、その教育事情を視察してもらう。また、フランス文化省などの好意とあっせんにより、政界要人、小学校などを訪問し、ローマ法王に謁見するなど「こども大使」としての親善旅行の成果をも、あわせてあげてもらう。(朝日新聞社)

1月4日 東京空港出発「フランス航空」機、北回り  
(アンカレジ、ハンプブルグ経由)

5日 パリ・オルリー空港着  
青少年スポーツ省(ミソフ同担当相) 日本大使館などを訪問



(ミソフ青少年スポーツ相訪問のひとこま)

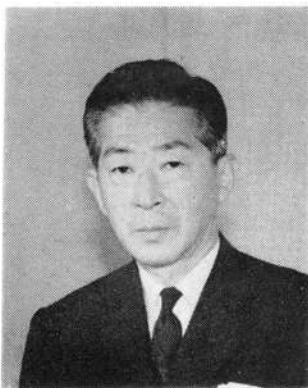
- 6日 パリ市内の小学校を訪問、交歓
- 7日 農村地区の小学校を訪問、交歓、観光
- 8日 パリ小学生と交歓
- 9日 ミパリの休日。(フィガロ新聞社、フランス航空社訪問、市内見物)
- 10日 パリ発「フランス航空」機ローマ着  
日本大使館訪問
- 11日 在バチカン日本大使館訪問、ローマ法王に謁見



(後姿がローマ法王)

- 12日 ローマ小学生と交歓 ミローマの休日。(市内見物)
- 13日 ローマ発「フランス航空」機、南回り(テヘラン、デリー、バンコック、ホンコンなど経由)
- 14日 東京空港に帰着





## 日本一健康優良児を出して

大阪府寝屋川市立北小学校長

本 田 義 一

本校の中村恭子が日本一に選ばれたについては、いろんな要因がある。すなわち

1. 本人の素質
2. 両親のたんせい（家庭環境、教育）
3. 学校の教育方針
4. 担任の努力
5. 校医、職員、PTA、その他の協力

——等がお互いにかみあって、相乗的な効果を発揮した結果と思う。

だから、学校の教育方針というのもその一因をなすにすぎないのであって、これについて書くのも、いささか、晴がましい気もするが、あえて書くとするならば——

はじめから、自賛めいたことで恐縮であるが、本校が本年度にあげた対外的な主な成績はつぎのようなものである。

- わが寝屋川市では、本市独自の健康優良児選定制度を早くより設け**身体、運動能力、学力、人物等**について審査を行ない、一定規準以上の者を**本市健康優良児**とし、その中から、寝屋川市健康優良児第一位を選ぶのであるが、本校は男女とも第一位を出し、しかも一定規準以上の優良児は20名（各校平均10名）の多きに達した。
- 本市および北河内ブロックドッジボール大会優勝
- 本市陸上・競技水上記録会総合成績いずれも第一位
- 全府下対象の音楽教育研究発表会
- 全地区対象の国語（聞く、話す）研究発表会
- 本校教育に対する寝屋川市教育委員会賞

これらの成績をあげ得たについて、学校の教育方針におうところがあるとすれば、つぎの諸点をあげることができると思う。

本校は、この数年来、つぎのような**児童像**をめざして、教育実践につとめてきた。そして今にして思えばこれらが、中村の身体、運動能力、学力、人物の審査に相当役立ったように思う。

### 1. たくましい子

- 心身ともにがんばる根性のある子
- 弱音、泣き言を言わぬ子
- ファイトをもって、すすんで苦難に打ち向かう子
- 最後まで、やり抜き、生き抜く子

### 2. 考える子

- 学習 その他の面について、常に積極的に考え、行動する子

### 3. 折目正しい子

- 分をわきまえ、恥を知り、みずからけじめのつけられる子
- 正しいことばのつかえる子
- 節度ある行動のできる子
- 正しい服装の子

### 4. 奉仕する子

- 公共物を大切にするとともに、すすんで奉仕する子
- 恩を知り、誠をつくす子

### 5. 心豊かな子

- あたたかく、うるおいのある、素直な子
- 明るく、やさしく、親切な子

#### ① のためには、

体育その他で、たくましい精神とともに、たくましい体力の増強をはかり、特に**がんばり**と**ファイト**、**勇気**を養うため、本校独自の鍛練具を使用するとともに、多少のハードトレーニングも辞さない。また、一方保健の面では、特に**近視**、**う歯**が、いかにその人の一生に大きな影響をおよぼすか、その利害得失を十分知らせるとともに、予防治療について、習慣化するまで、徹底的に指導する。

#### ② のためには、

授業の実践の場、その他あらゆる機会をつかまえて、みず

から考え、みずから前向きに、とりくむよう指導する。

③、④、⑤のためには、

道徳、国語、音楽、体育を本校の特別研究あるいは、重点指導教科としてとりあげ、特に道徳においてはしつけと人間関係、国語においては、「はなしことば」と人間関係、音楽においては情操とうや、体育においては、前述のほか

に団体行動における規律と秩序および、身体の調和した発達をはかる。

——等、全職員一致協力してその実をあげるために努力してきた。

しかし、何といっても日本一というのは大変なことである。この最後の仕上げをしたのは、担任の河南教諭の献身的な努力を、わたしとしては看過することはできない。中村恭子が候補にあがってからの彼の努力は、文字どおり寝食を忘れ、その打ちこんだ姿は誠に涙ぐましいばかりであった。全国から選ばれた10人の特選児中一番小さかった彼女が日本一の栄誉を勝ち得たのは、かれ自らが先頭にたつての運動能

力、その他のハードトレーニングによるものが多かったと信じている。

事実、中村の記録はつぎのように上昇し、東京における中央審査会では、懸垂、幅跳とも第一位であった。

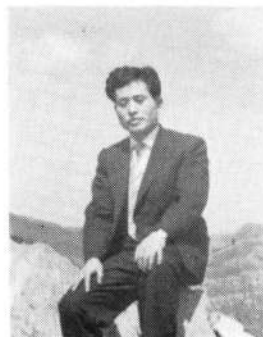
| 審 査     |  | 寝屋川市  | 大 阪 府 | 東京中央  |
|---------|--|-------|-------|-------|
| 種 目     |  |       |       |       |
| 懸 垂     |  | 27秒   | 29秒   | 50秒   |
| 幅 跳     |  | 3 m90 | 3 m96 | 4 m11 |
| ボ ー ル 投 |  | 32m   | 36m   | 40m   |
| 50 m 走  |  | 8 秒 3 | 8 秒 1 | 7 秒 8 |

以上、ごく概略であるが、学校としては、よい教師、よいPTA、よい児童、の一致協力によって、今後一そう健康（知、徳、体）教育の実を上げるよう、不断的努力を続けて行きたいと思っている。

## 健康優良児日本一 中村恭子

大阪府寝屋川市立北小学校教諭

河 南 和 男



次の文章は、中村恭子が、日本一になった後に書いた作文の一節です。

「今のわたしには、何もかもが、幸福で、そして、喜びなのです。これが味わえるのは、あのつらく、きびしかった練習と、毎日の学習のおかげです。あの練習は、わたしに大切な心の教育をしてくれたのです。

わたしが、日本一になったということは、うれしいことですし、名誉なことです。しかし、それよりも、もっとうれしいことは、この期間に、河南先生は、わたしに、自分で、自分の心の教育をさせてくださったのです。このことが、一番、大切な、今のわたしにとって大切なことなのです。」

わたしは、ここに、健康優良児日本一の中村恭子の持つ、真の学力を見つけることができるのです。

きびしかった練習で得たもの、それは、けっして失なわれない宝なのです。このたくましい根性の宝を、これからも、みがいていってくれることと思います。

いつでも、今の自分を知り、その自分にとって、大切なものは何かを考え、そのことを学ぼうとする態度、これこそ、わたし自身が、教育するものとして、たえず、考え、実践しようとしていることなのです。

中村恭子は、日本一になった思い出よりも、この学びとった過程の思い出と、自分の身体の中に残っている、何ものかを、いつも大切にしていくことでしょう。これが、できることこそ、日本一の健康優良児の真の価値だと思うのです。

学級全体の中で、学校経営の方針なり、友だちとの、まじわりの中でも、このような考え方を大切にするようなものに望んできたのです。

また、次のようにも書いています。

「日本一の健康優良児だからといって、世間の目から、かたくみられず、のびのびと自分の生きたい方向に進みたいのです。これから、今までのように平凡にすごしていきたいのです。わたしは、今幸せです。それは、日本一になったというからではありません。父、母、ふたりの兄とでの、あたたかい家庭があるからです。わたしは、日本一にならなくても幸せだったでしょう。」

自分の家庭について、これほど信じて、大切に思える児童は、そう多いものではありません。健康優良児が育つ、健康な家庭だからこそ、そう思えたのです。

それを、感じとることができ、それを、このように考え、表現できるのは、もちろん、中村恭子の学力が、すぐれているからです。けれども、いくら、その学力があっても、それを考えさせる場がなければならぬのです。中村さん一家は、まさに、健康優良児を生む、健康な家庭だったのです。

ここには、主体があると思うのです。学校教育に、ふりまわされ、学校教育の一部にしかになっていない家庭教育の姿から、一步出た家庭教育の主体があると思うのです。

家庭があって、家庭教育のない、宿題と、ドリルと、テスト等による、学校教育の下うけ機関としての家庭教育の位置を、もっと考えなければと思うのです。真に健康な家庭には、主体があります。そのような家庭を、少しでも多くするよう、担任も考えなければなりません。

中村恭子の11月中央審査当時の体位、体力は次のとおりです。

|    |          |          |           |
|----|----------|----------|-----------|
| 身長 | 154.1 cm | 50 m 走   | 7 秒 8     |
| 体重 | 47 kg    | ソフトボール投げ | 40m(1号)   |
| 胸囲 | 77.8 cm  | 走り幅とび    | 4 m 11 cm |
|    |          | けんすい     | 50秒       |

体位については、全国特選児童の中では一番小さいものではないでしょうか、けれども、きびしい練習により、体力は、すべての面で、すぐれていたのです。それも、審査会当日に最高記録を出せたのですから、その心の持ち方の教育が、最もうまく行なえたと思うのです。

体力だけではなく、すべての学力は、思考力をのばすことを考えた転移力のあるものにしなければなりません。そして、その中には常に、人格形成につながる、何かを考えていなくてはいけないと思うのです。教育とは、すべての行動の中で、すべての授業の中で人間性をのばし、人格をみがきあげていく過程だと思うのです。

中村恭子は、わたしの、そのようなことを考えた教育の取

り組みにおいて、多くの児童が、学んだ、最高のものを学ぶことのできた児童といえることができるでしょう。

最後に、国語の学習の中から、中村恭子の人間性あふれた学力をあげてみることにします。

教材「大きなしらかば」の読解学習から

『ジーナはかけよると、むすこのきずだらけの小さな足をだきしめ、小声で言った。

「アリョーシャ、約束してちょうだい。もう決して、こんなにおかあさんを苦しめないって」いきなり、ジーナはなきだすと、口をおさえてかけだした。』

(本文)

#### 恭子のノート

やっと木からおりてきた。そのとき母親はいままでのおどろき悲しみをいっぺんに出してしま

まったのだろう。ここを読むと、わたしまで、なみだが出、胸があつく思う。

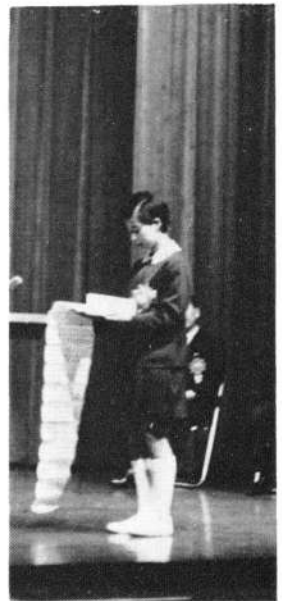
さっきまで、れいせいにふるまい、りっぱであったジーナも、やはり女の人である。何もかもおわってしまい無事にすんでしまった今、

今までのことが、なみだになってあらわれてきたのだろう。

母の苦しみ、つまり愛情が、なみだになって、アリョーシャの小さな足をだきしめたあとジーナの目からあふれ出たのだろう。アリョーシャが、木をおりるとき、声にも顔にもみせなかった、母の苦しみは、子どもを思うため、子どものため心の中でまんしてきた、でも今はなかずにおれなかったのだろう。人が考えられないほど母の苦しみは、大きく、また、たえられないような悲しみがあるのだろう。でもそれも、すべてが終わった、きけんが、去ったから、苦しみと、悲しみとがあとから愛のかたまりとして、あつい、あつい、なみだがジーナのほほをつたっていったのだろう。

母親とは、愛情をもっているときほど強いときはない。

(恭子の学力、人間、考え、すべてが表われていると思います。)



謝辞を述べる中村さん



### ● 興味と自信

低学年の頃である。「僕ね、本当は選手になれたんだけど紅白から選んだから駄目だった。白の選手より本当は早いんだよ」何としてもリレーの選手になりたい彼の念願からの言葉であった。私はなかば遺伝とあきらめ同情していた。主人は親馬鹿のふびんさから、毎年運動会近くなると早起きさせて、自分も一緒にマラソンの日課が始まった。鉄棒ができないと聞くと近所の学校で自分も一緒にぐるぐる廻る子ぼんのう振りを発揮していた。

努力の甲斐あってか、運動に自信と興味を持つようになった、学校から持ち帰る体重表の目もりが急カーブに上昇していき、スマートな坊ちゃん型からめきめきとたくましさがあらわれ始めた。

体育ごたんのうの現担任に受持っていただいた当初、「50m走の記録は7秒6」5年生の始めである。何秒が早いのか見当もつかなかったが、息子の嬉しそうな報告を聞いていると、とても楽しかった。

運動環境にめぐまれない女子の学校で育った母親にとって、息子の運動能力は何にもまして嬉しく、それだけで涙の出る思いであった。

がんばりやの彼は、それから環境にまけず、運動に、学習に自分の力でどんどん伸びてくれた。実行力のある子どもに成長してくれたようである。

でも、区代表、都代表と次々にパスしたときは、まさかと思ったし、このたびの日本一という賞にはまるで夢をみてい

るような気持ちであった。忙しくて世の親のようにめんどもみてやれない環境であったのに、「雅仁、よくやったね」と主人共々、感激の涙をこぼした。

### ● 心身のバランス

思えば、雅仁は教師という忙しいつめを持つ両親の家庭に、一つ上の姉のあと、誰にみてもらおうかなどと、けなされながら生まれた。あの頃は産休補助教員の制度もなかったもので、ろくろく乳もあたえられず、すぐ母親の手から離れる運命にあった。

人はよく「お宅は教育環境がいいですね」と言ってくれる。しかし、他人の子どものせわはやれても、自分の子どものめんどうまでは手がとどかなかった。昼間は近くに住む祖母にほとんどめんどうをみてもらい、夜はつれて帰るという忙しい生活であった。

しかし、時間のゆるす範囲でバランスのとれる食事の献立でのくふうをしたり、休日には郊外の山、高原、海などに連れだし、ボール投げや、かけっこ、すもう、水泳などをして体力づくりに心がけた。「何でもよろこんで残さず食べること」これを主人みずから実行し、家中の食事のモットーとした。

この他に注意した躰としては、「人に迷惑をかけるな」「自分のことは自分で」「礼儀正しくすること」これだけは放任主義の家庭でも少々やかましかったと思う。さいわい小さいときから、ききわけのある、素直な、親思い、きょうだい思いの明るい子で、人様から「よい子だ」と言われながら育ってくれた。

### ● 信頼と愛情で実践力を

小学校に入ってから、さらに心機一転、全くせわのかからない坊やであった。「どんな育て方をしたのですか」と聞かれるほどで、私たちはいつもここまでにして下さった担任の先生方に感謝しつづけていた。

「ベストをつくせ」これが、小学校時代の今までにあたえた親の言葉である。主人はよく、「能力があっても実行しなければ、できないものと結果において同じだ」と言い、自らも身軽く、実行で示すようにしていた。そのせいか、私たちは特別ごとがましいことを言ったり、あれこれとさしづめいたりする必要がほとんどなかった。何か問題があれば友たちのような気分で相談したり、話しあったりして解決していった。余り叱ったという経験はない。子どもの人格を尊重し、全面的に信用していた。

素直さの中にユーモアがあるので、あの子と話している

と、一日のつかれも飛ぶ思いがする。夕食のあとなど、かなわないとわかっていても、ざしきでどたばたとすもうをしたりして童心にかえる楽しさは格別であった。

家庭という大きなふん囲気の中にやわらかく包んでやること、遠くから見守ってやることといったふうに、特別なこともせず、それこそ徹底した放任主義のような形であった。今にして思えば、親は勝手に忙しがっていても子どもに関しては生みっぱなしであった。時には友だちのおかあさんをみて、どんなにか淋しい思いをしたことであろう。ぐちも言わずよくここまでできてくれた。

訪政準備のため、正月の何日かをホテルで他の先生方と過ごしたそのときも、おとなと対等に話のできる彼を改めて見直し、これならどうにか大任を果たすことができるだろうとひそかに安心したものである。



恭子が、健康優良児日本一になることができました。このようなことになるとは、まったく考えてもみませんでした。それだけに、喜びも大きなものでした。日本一になることができましたのも、河南先生をはじめ、まわりの方々のおかげだと思っています。

恭子のこれからの生活の中で、この日本一になるまでのみなさんの心のこもった思いやりが生きてくるものと思っています。きびしい練習の中で、身についた力が、これからの恭子の生きる力になるものと思っています。

わたしは家庭におきまして、健康優良児日本一にするための教育も、手だても別に行なったわけではございません。ただ、家庭が明るく、健康な生活を子どもたちがおくってくれるよう心がけているぐらいのものです。恭子は、生まれたときから、あまり手のかからない元気な子どもでした。これからも明るく、健康な生活ができる子どもになってくれるよう望んでいるのです。

学校の教育のことは、すべて先生におまかせし、家庭におきましては、子どもの生活の場としてのうるおいのある、落

## ● よき師にめぐまれて

現在でも、月水金の夜間は水泳に通い、9時頃帰宅、それから勉強と、体力的消耗のはげしい生活をしている。おかげで肩の筋肉のたくましく発達したこと、胸囲88cm、体重56kg、身長も伸びて163cm、審査の時からくらべると、また、一段と発育したようである。

「勉強と水泳と両立させたい」と担任の先生のご指導もあったか、毎日はり切っている彼、私たちまでうかうかしてられない気持ちにかりたてられる。生活にはりを持たせてくれる彼、どうか、今後も心身の健康に注意して自分の道をきり開き、希望に向かって邁進してってもらいたい。

ちょっぴり謙きよな心も忘れずに。

## 恭子を育てて

中村エミ

着きと安心を与えるところにするよう考えることが、大切だと考えているのです。そのような家庭にすることが、健康な生活に結びつくのではないのでしょうか。

大学進学を一年後にひかえた長男と、今年高校進学をむかえた次男が、おりますが、家庭の中は、明るく、みんなが、何とか、自分の力を出して、自分の道を進んでくれるよう努力しています。食事のときなど、みんなの話が、はずんで、とても、楽しいひとときになるのです。

末っ子が、日本一になったことによって、兄たちも良い意味で、はげみになり、自覚をもって進もうとしております。すべてのことを、家庭の中で、良い方に向けることを考えることも、親として大切なことのように思います。ひとりの喜びは、家族みんなの喜びに、ひとりの悲しみはみんなの悲しみとして考えて、みんなで考えていけるような家庭を、これからもつくっていきたいと思っています。そして、子どもたちに少しでも、家庭愛の大切さを味わい、知ることができるようにしたいのです。



## 仏・伊のこどもたち

海南省立黒江小学校長

山 本 史 郎

### パリー第10区男子小学校訪問

#### ■ 優等生3年で卒業

小学校は6歳から11歳までの5年制である。11歳で国家試験があり一定の点に満たないと何回でも落第する。現に、ここには15歳の子どもも何人か在学习しているという。しかしクラスの中で、互いに見下げたり、ひがんだりというような偏狭の感情は全くないようだ。



(フランスの小学生)

一方、できのよい子は1年から3年へ、3年から5年へと、まさに三段跳びの鮮かさと小学校をわずか3カ年で卒業していく。

国家試験に及第した子らは、上位は中学コースへ、残りは職業専修コースへとふるい分けられる。こうしたやり方について、子どもも親も当然のことと心得て何らトラブルは起きない。

#### ■ カギっ子に豪華給食施設

この学校では、両親共働きのいわゆるカギっ子のために給食をしている。児童数500の約半数220人が給食をうけ、そ

のうち20人は給食援護児でももちろん無料である。

1食147円、町の食堂では420円の食事だというから、まさに豪華版というべきであろう。

### バンブ市女子小学校訪問（フランス）

#### ■ 充実した体育施設

——先生も全部女性の女子校——

入口は2mほどの狭さ、それも片方だけしか開いていない。母親が子どもを連れてくる。校長が入口で1人1人を確認して子どもを受入れる。いそがしいことだ。フランスでは、2年生まで実際には4年生ごろまでは子どもの登下校には必ず親が学校まで送り迎えする。放課後、校長は最後の1人を親の手に托して、そこで初めて管理の責任から解放される。たとえ共稼ぎの家庭といえども、例外は絶対に許されぬというきびしさである。

この学校は文部省の実験学校であった。最も進歩的な教育をしているという。読み書き、算数は毎日午前中だけで、午後は、月曜・機械体操、火曜・トラック競技、水曜・図工、金曜・ダンス、土曜・裁縫と、課業を振りあてている。とくに体育を重視していることが、この日課表を見ても明らかのように、施設面でもプール、屋内体育館、屋外体育場もある。

ボエス校長は

「私の学校では、読み、書き、算数だけでなく、スポーツなどにも力を入れています。そのわけは子どもたちの適応性を育てたいからです。さらに、子どもたちが教科以外の別なものを勉強できるように、ときどき博物館の見学などもやらせます」

と。日本で昭和の初期やったような教育内容が、いま最新の教育内容として子どもたちに与えられようとしているのである。

### ローマの小学生と交歓会

#### ■ 物おじしない少年

日本文化会館におけるローマの小学生との交歓会でのことである。10歳ばかりの少年が進み出て、一席歓迎のことばを述べた。この子がさきから校長や館長夫人の席へ行き来していたのは、とび入りのあいさつをさせるとねだったのだそう。別段緊張するでもなく、淡々と、自然の表情で話す姿は、とても好感がもてた。その初めのきり出しが

「館長ご夫妻さま。今晚、私のために、とくにあいさつする機会を与えてくださったことを光榮に存じ、心から感謝いたします」

ということばだったというから愉快である。

ジュセッペ・ラテルツァという名まえのこの少年は、あとで年を聞いたら

「1月15日で10歳になる」

と答えた。自国語のほか、英語、ドイツ語も話せるそうだ。私が帰りがけに「グラツェ」といって握手したら、すかさず日本語で「さようなら」と切返してきた。

## ■ いなかに目立つ未就学児童

イタリアの初等教育は、いちおう制度化されているが、社会的に組織化された形で動いていないといわれる。就学も2～3年のズレは問題ではないし、いなかには未就学児童が相当数いる。

授業も午前中だけ。それも読み、書き、算数に限られているということだった。

## 放課後の生活

### ■ 自由にならぬ外出

——ひとり遊びや家事手伝い——

だれかが

「パリの印象を一言で」

といった。わたしは

「まさに、とりすました貴婦人だね」

と答えた。

貴婦人は、とかく子どもを連れない。そろそろ引連れているのは、おかみさんという愛称で呼ばれる。パリは大人の町である。どこに行っても、ほとんど子どもの影は見かけられない。そこには情感がない。整然としていても陰しさを感ずる。

パリで最初子どもを見かけたのは、エッフェル塔のそばだった。7、8人、緑の芝生でドッチボールに興じていた。つぎに、地下鉄から通りへ出たとき、3歳ぐらいの幼児が小犬のように背にひもをつけてひっぱられていた。3回目は、学校帰りらしい少年が、長パンを2本、小わきにかかえて足早に通り過ぎていくところ。それから4回目は食堂で。1週間近い滞在期間中記憶に残るのはそれだけ、通訳の本田さんは

「日本は子どもの天国です。こちらの子はい縮しています」

といった。食堂で見かけた子どもたちは、2組の夫婦に伴われた2人であった。親組と子組は別々に席につき、全然無関係だ。本田さんは

「こちらでは、子どもをおとなの話の中へ絶対立入らせません」

と説明してくれた。

子どもたちは、放課後、なにををしているのだろう。

パリの豪壮の建物は、実は、アパートである。1室、2室と細分して、そこに市民の思い思いの生活が営まれている。子どもたちは下校後も日本のように勝手気ままな外出を許されない。ある子どもは、オモチャの車を200も集めて、ひとりで遊んでいるという。その他、家事を手伝ったり、たまには何時間かの許可を得て、友だちのアパートへでも出られれば上の部だ。

学校は仏、伊とも、日曜以外に木曜も休日である。この日は家庭が宗教教育を施す日である。もともとこれらの地域には教会の経営する学校が多かったのを、政府が公立に統一したものだ。そこで宗教人の不満を緩和するために、木曜日を公立学校の課業から解放したのだという。したがって、子どもたちはこの日は親に伴なわれて教会にでも行くことだろう。

日曜日は親子連れで郊外の森や公園に出かけるものが多いと聞いたが、実情は知らない。

パリ市内第一の盛り場ヒガールでも小学生の姿はついに見られず、まして子どもばかりで飲食とか映画館へ出入りするというようなことは、これらの国々ではむしろ自由のラチ外のことと考えているのかもしれない。

それにつけても、わが国最近のローティンの問題も、実はわれわれ成人の考え方にこそキーポイントがあることを知らされた。

## 片々草

「日本一健康優良児は一日では生まれない」優良校またしかり。すべての条件の結集であり、尊い努力の開花である。校長は担任教師を、教師は児童を、保護者は学校を、その言やよし。

草萌えの空に歌あるあしたかな

仏・伊の子どもたちより進歩した教育を受けているという日本人の「望ましい人間像」は絵に描いた餅か

くず山の写真も添えて花だより

スウェーデンでもデンマークでも、水の危険のある川・港・池などには、よく目につく所に赤と白に塗りわけられた救命用具があって、必要なときにはだれでも使えるようにしてあるという。いよいよ水の季節

追弔の香目にしみて練る施策

(S.O)

# 給食時における保健指導はいかにあるべきか

仙台市立中田中学校

丹 野 茂 美

## ◎ は じ め に

私の勤務している中田中学校は、仙台の南玄関口で、野菜の供給地であり、最近では郊外の住宅地として発展しつつあるので、職業としては農業と会社員という地域で、生徒数は668名、学級数は15学級です。

仙台では41校全部の小学校が完全給食を実施しているが、中学校は牛乳給食だけ実施しているので保健指導も栄養指導に重きを置いている。

## ◎ 保健に対する関心

前校長が学校保健に対して深い関心があったため、学校保健には特に力を入れ昭和37年、38年の2カ年間にわたり、学校安全教育指定校として、ミクラブ活動の事故防止はいかにあるべきか、というテーマで、明朗でたくましい体力、意志力の養成に、全校一体となり研究に当たり、その成果を東北ブロック安全教育研究大会、全国安全教育研究大会でも発表している。

また40年度には県から学校保健優良校として表彰をうけ、ますますその成果はあがっている。

## ◎ 本 論

このような学校保健の組織にあって、給食委員会は特に作らず、保健委員会で給食の一切の仕事を行なっている。

### 保健委員の仕事として

1. まず保健委員は手洗い特に消毒液による手の消毒を学級内の生徒に指導徹底させること
2. 牛乳の運搬
3. 食前食後のあいさつ。給食時を利用した学活

この1, 2, 3について、各クラスで問題にし話し合った。そして実行に移したがなかなかうまくいかなかった。

そこで保健委員会にかけ、なぜ小学校で、すでに習慣化されたことが、中学校でできないのか、各クラスで調査し、再

度委員会を開いて発表させた。

その結果次のことがわかった。

1. 昼食時間が短いので早く給食をすませたいためにしない。
2. 昼食の時間になって、消毒液を保健室に取りに行くのに時間がかかるのではない。  
そこで学校長とも話し合いをし次のようにした。
1. 昼食時間を40分とした
2. 手洗い消毒液は3校時の休み時間に各クラスに、また遠いクラスは薬の入っていた小さいビンに分けてクラスで保管させる。
3. 牛乳も保健委員が毎日配給するのが大へんなので、日直制にして3校時の休み時間に各クラスに持って行くことにした。

これによって牛乳の運搬、配給の苦労等がわかり、責任を持って仕事に当り用のない生徒は着席をして担任の来るのを待った。

後になったが、私の学校は昼食時は必ず担任が付いて昼食を行なっている。

給食終了もまちまちで、隣の教室等にも迷惑を掛けていたが、ベルを合図に一斉に終了することにした。

給食も全校一斉に終了するため、手洗いの件も解決し、ベルが鳴るまで各クラスとも学活をし、廊下等に出ないことにした。

中学校では教師と生徒の話し合いの場が少ないので、この給食時の学活で、特に家庭訪問やその他でわからなかった面等がわかり、また教師と生徒の間を身近かなものにした。

## ◎ 栄 養 指 導

学活で毎日生徒の弁当等を知ることができ、問題になった事は、体力体位の向上に欠かすことのできない栄養が、弁当を見た面では片寄っているということである。

卵やソーセージ、ハム、魚類が多く、また中には20円の菓子パンだけで昼食をとっている生徒もいる。

こんなことではというので各クラスの弁当の調査を行なっ

た。その結果は、

蛋白質源である食品は多く摂取しているが、ビタミン源である野菜果物の量が少ない。また見逃せないのが、先にのべた菓子パンを持って来る生徒の多いことである。

1年生は小学校で給食のパンにあきっているためか、14%と少ないが2年生になると26%、3年生は30%とクラスの半が菓子パンを食べている状態であった。

これはいろんな面が考えられるが、前にも述べたように、中田は野菜所であるが、今は住宅も建ち並び一部住宅地化してきているので、今までの農家が食生活にも関心を持ってきた。また夜遅くまで畑の仕事をし、母親が、朝は早く畑に行き、帰ってから食事の用意という家庭もあるので、佃煮とか、漬物、納豆のように簡単に食べられる物で食事をするようになる。従って、弁当も手近にあり、しかも調理しやすい魚、卵とか肉の加工品になる。またこんな食品は持ち運びにも便利である。このように栄養はアンバランスで、各個人の身体の発育状態、体力の面においてかなり考慮されなければならない問題を含んでいる。

生計の主体をなす者が農業であっても、文化的に接触度が多いと思う者が生活上重い位置にある家庭では、食生活においても、他と比較してかなりの相違が見られ、嗜好的な食品のとり方等も、民主化した現在でも、年寄が多い一部農家では封建的なところが残っているということは見逃せない事実である。

また同じ仙台市立の旧市内の中学校3年生の弁当を調査した結果では、パン食は9%にすぎず、わが校の30%に比べれば大ぶ少ない。

旧市内の学校と違い、栄養面にも文化的、時間的にも、農業地域における家庭の差がはっきりと表われていた。

この栄養に対する知識を、生徒を通じ家庭にも啓蒙する意味から、40年の3月から、毎日給食時に、牛乳と併用してビタミンCの入っているカワイ肝油を服用させている。

この肝油は、野菜からとりにくいビタミンCやビタミンAを効果的に取るには一番安全でまた安心してとれると言われている。

ただ注意を要することは、ビタミン剤の中には成分の含有量が明記されていても、実際にはその量に達しない製品のあることである。

その点ではカワイ肝油はさきの第16回全国学校保健研究大会の時にも東京都のある学校薬剤師の先生からも良い肝油と折紙をつけられた製品です。

この肝油服用後の利点としては、ビタミンA、D、Cを補うことができ、農家でよく見られる米のとりすぎから来る口角炎は1名も見られなくなった。

秋から春にかけて流行したインフルエンザの欠席も、38年は1日13.4名あったのが、39年には10.1名、40年には6.9名と半減した。特に3年生は、受験を控えて一番体力的にも弱く流感に罹りやすい時期にあったにもかかわらず少なかったことは、疲労にビタミンCがいかに大切であるかを物語るものではないかと思う。

このような結果を、PTAの総会や学年PTA等で発表し食生活が身体に及ぼす影響の大きいことをわかっていただき家庭を通じて栄養指導、食生活改善の向上に協力してもらった結果、5年前までは身長は仙台市中学校最下位、ただズングリ型で体重、胸囲だけは市平均並でしたが、39年度からは、大ぶ良く41年度には中に位するに至った。

また健康優良生徒にも2年連続県入賞。3年連続市入賞に至った。

## 本校保健教育のあゆみ

北九州市立中島小学校

広 吉 勝

### 学 校 の 環 境

北九州工業地帯の中央部、小倉区のほぼ中心、市内最大の交通量がある国道3号線と、国道10号線の交差する三萩野交

差点の近くに位置する本校は、児童数950名（内男子485名 女子465名）学級数26学級（内、特殊学級1学級）の学校で交通の危険地帯である。このため昭和40年7月1日から、運動場開放校として市から指定され、土曜日の午後、日曜、祝祭日、休業日には、附近の小中学生たちの遊び場となってい

る。

子どもの教育に対する父母の関心は高く、教育に対して非常に熱心で、協力的であり、PTA会長を始め、地域全体が、保健教育については積極的に努力し、交通量の多い三萩野交差点には、十文字の陸橋（人道橋）の設置を国に働きかけ、昭和41年11月には九州で最初の十字型の陸橋の完成を見るに至った。

昭和28年以来、本校の校医になられた月守先生は、本校修学旅行には、旅行先で児童たちが病気になるのはかわいそうと、本年まで実に14年間、一度も欠かさず児童の旅行に付添ってくださっている。開業医である校医さんは休診の札を出して仕事を休まれ、一泊二日の修学旅行に毎年つきそって下さっているが、お礼も全然受けられない。この熱心な校医さんを中心に、全職員、地域社会の人々の協力により一致団結して、児童の健康増進につとめている。

## 保健教育の概要

### 1. 基礎体力の向上

かねてから本校では基礎体力を向上させることが重要であるとの観点に立ち、昭和34年度以降、毎年学校研究主題を次のように保健体育にとり、研修に励んできた。

昭和34年 移行期における、体育指導法の考察

昭和35年 体育科技能面における基準性の一考察

昭和36年 技能の系統性を重視する体育指導

昭和37年 学習内容の一体的取り扱いを重視する体育指導…  
3カ年計画の第一年次

昭和38年 同上第二年次

昭和39年 同上第三年次

昭和40年 体力の向上を目指す効果的指導（3カ年計画）

第一年次 体力の実態調査の研究と、基礎的な運動能力を伸ばす具体的な方法



（青木選手の平均台）

昭和41年 同上

第二年次 児童の実態の再検討をし、学習内容と基礎的運動能力の結びつきの研究。

この間、34年、35年、36年、38年と対外的に保健体育を主体とした研究発表会を実施した。

過去の研究実績を回顧すると、昭和13年に福岡県体育優良学校に指定され、16年には、当時小倉市では、他校に先がけてプールを築造し、水泳指導による体力の増進をはかった。

土俵場をはじめ、いろいろの運動施設を充実し、体位、体力もますます向上している。この施設設備はPTAの奉仕によるものが多く、古くなった用具や器具を利用して新しい設備を作り、PTAと職員によるペンキ塗りを毎年1回（主に夏期休業中）実施し、保存活用をはかっている。



（鶴見選手の平行棒）

昭和40年4月9日、東京オリンピック体操選手（竹本、鶴見、山下、早田、池田、千葉、鈴木、青木の各選手）を本校にお迎えして実演を見学し、直接指導を受けた。世界トップクラスの各選手の妙技に満場はただ夢見心地。これを契機として、体育熱はいやが上にも上昇した。

校内体育会としては次の行事を計画的に実施している。

4月…体力測定

5月…リレー大会

6月…球技大会、リレー大会

7月…器械運動大会、水泳大会

9月…水泳大会、リレー大会

10月…リレー大会

11月…球技大会、リレー大会

12月…器械運動大会

1月…持久走リレー大会

2月…縄とび大会

### 2. 安全 教育

交通量の多い三萩野交差点を校区内にもつ本校は、交通戦争の惨害を嫌でも見せつけられることが多い。このため、人



命の尊重、交通ルールの徹底を、一人一人に絶えず指導し、年1～2回の交通教室、通学コースの設定、全児童の血液検査等を実施している。

地域社会に働きかけて、全国的にもめづらしい三萩野陸橋の完成と、交通戦争に対処している。一方、校内での事故の減少について、校医、養護教諭を中心に学級担任による打ち合わせを行ない、安全についての関心を高めている。

交通事故防止については、常に積極的に取り組み、このため放送局から感謝状を2回受け、41年5月5日には県知事から交通事故をなくす県民運動で表彰された。

### 3. 保健指導の徹底

・学校保健委員会

学校医，歯科校医，学校薬剤師，地区医師，PTA会長，副会長，体育部長，副部長，学校長，保健主事，体育主任，給食主任，養護教諭，児童代表

学校保健は学校だけで解決することは不可能に近いので、地域全般の協力を得て、綿密な計画のもとに活発な活動ができるよう努力している。

熱心な校医さんの協力により、毎月1回の健康相談、修学旅行、運動会前の健康相談、春秋2回の検便駆虫、よい習慣づけをねらった手洗い、うがい、薄着の指導、新旧校舎の入り交った校舎内外の清掃の徹底、社会的行事にあわせた、よい歯のコンクール、健康優良児の診査、結核予防、目の愛護等、保健関係については特に意識的に指導している。このため、昭和40年3月21日、学校歯科口腔衛生優秀のため表彰された。

#### 4. 給食指導および家庭の食生活の向上

積極的に健康増進のため好き嫌いをなくし残菜を出さないよう努力している。同時に家庭にも給食を理解してもらうため、給食試食会をもち、献立表を配布し、料理講習会を催して、家庭の食生活の向上に寄与している。

長期間の肝油の服用の結果、眼疾、近視、むし菌、皮膚炎患者が少く、肝油の効果を今さらのように確認している。

## 5. 集團行動

月曜朝礼の際、鼓笛隊による行進練習、水泳指導、宿泊訓練、キャンプ等において、戦後特に見劣りのしたこの点の指導を強化している。

## 6. 環境の施設の充実

都会の中心地にある本校は緑が少なく、うるおいに欠けていた。（昭和39年）学校火災で8教室を失い悲しみにしずんでいたが、この焼け跡に植樹して緑の森づくりをしようと考えた。そこで、校内緑化を計画し、県農林試験場小倉分室に出かけ、自費でそれぞれ苗木を買い、児童たちも自宅から木や現金を持ち寄り、焼け跡に植えた。以後年次計画をたて緑の学校にしている。

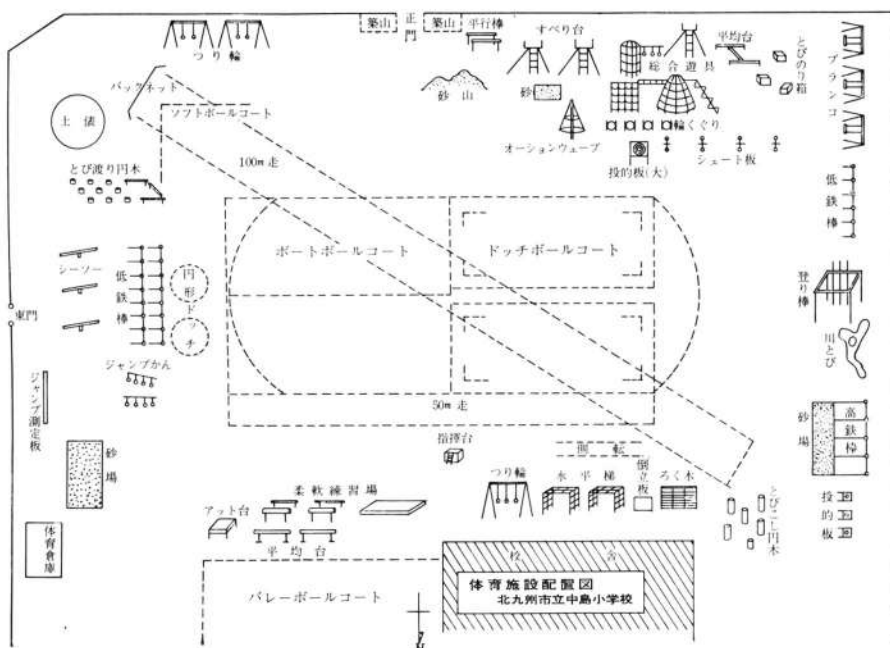
豊かなうおいを与えるため、植樹と共に花壇経営にのりだし、四季花を絶やさないやさしい心情の持ち主を育成するため、校内いたるところに花壇を作り、情操の陶冶に寄与している。このため、昭和40年、41年と連続、北九州市の花壇コンクールに入賞します環境は充実されつつある。

運動用具その他の施設の充実は下図のとおりであるが、これは昭和41年度全国体育研究大会にも発表し、資料を提供しているが、これらはみな職員の努力と、PTAのみなみならぬ協力の賜である。

真夏のどんな暑い日でも、朝礼時に倒れるような子どもは1人もなく、顔色も健康そのものである。

今後もますます本校児童の体位向上健康増進をめざして、健康教育実践の道を邁進したい。

体育施設配置図



## 骨の強い子に育てよう

札幌市立幌南小学校長

河 端 賢 一

最近学童の体格が著しく向上し、とりわけ身長・体重の増加がはげしく学校の机・腰掛が古い規格で間に合わないという、うれしい悲鳴が聞かれる有様であります。しかしこのことだけで子供たちが健康になったと手ばなしで喜んでよいかどうか、再考を要するのであります。疾病統計によるまでもなく、学童の骨折事故は年と共に増加の一途をたどっています。もちろん、交通事故による骨折も大きな比重を占めてはありますが、それにしても、『体が弱い子』の多いことは否めない事実であります。

現代っ子は、いわゆる「ひよわ」に育っているのです。

骨を強く、たくましく育てるには、何をおいても、日光のもとで、自然の中で運動させることが第一であります。昔は、竹の棒を持ってとびまわり、虫網をかついで走りまわる子ども達の姿が、どここの原っぱにも見うけられたものです。石けりに興じ紙芝居のおじさんについて歩く子ども達があちらの路地、こちらの四つ角におりました。川原にも海辺にも、畑のすみにも、とにかく日の暮れるまで外で遊び暮らしたのが昔の子供達の姿でなかったでしょうか。

真黒に日焼けした子ども達の皮膚の底にはビタミンDはみちあふれていたことでしょう。この子どもたちは今、どこで何をしているのでしょうか。

路地は車で埋まり、原っぱにはビルがたち、川原は汚染されました。遊び場をとりあげられた子供達は、よくて、勉強部屋でテストブックに頭をかかえ、あるいはテレビの前におころんでいるのではないのでしょうか。

また、食べ物にしても、昔は切り干しにしておいた大根のしっぽを切ってしゃぶったり、みがきにしたにんじんをつまみ食ったり、海辺の子供達は海草や貝をおやつ代りに食べていたはずで、今の子はガムだ、チョコだとか刺激分、糖分だ

けをとっている有様です。骨の弱くなるのももっともでないのでしょうか。

昔でもやせてひょろひょろした子、かぜをひきやすい子もいました。ひよわな子を集めて太陽灯の部屋に入れ紫外線をかけてやったり、油状の肝油をさかずきに入れた砂糖水に浮かせて飲ませたものです。しかし、これはごく一部の弱い子にだけ与えればよいことでありました。大多数の子は、自然の食物の中からカルシウムなりビタミンをとり、自然の太陽光線からビタミンDで強くたくましく育っていました。

最近は食糧事情もすばらしく向上し、脂肪も蛋白も十分すぎで、かえって、肥満体の子どもが多すぎる状態になりましたが、ビタミン類はどうでしょうか。

厚生省発表の国民栄養調査によれば、食生活の近代化に伴い熱量、蛋白質量などは昭和45年の栄養基準量（目標値）の目標にかなり近づいているが、微量栄養素（ビタミン・カルシウム）の摂取状況は停滞しており、目標値の75%程度であります。また道教委発表の昭和40年度学校給食栄養摂取状況調査によれば、摂取不足のものはビタミンで、そのうちCとAが著しく不足しております。Cの不足は野菜や果物で充足させればよいのでありましようが、高価につくことと、時期的に難易があること、調理上の損耗が多いことなどのあい路があります。

ビタミンB<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>などは給食用パンの小麦粉に強化添付されていて、さほど不足はないと考えられます。従ってこのビタミンAとCとDの不足を一番、経済的効率的に充足させるのにどうしたらよいかという問題が残ります。

現在多くの学校で希望者にだけ肝油ドロップの服用をさせておる状態ですが、前述の現代っ子の生活から考えても、また学校給食の栄養分析から考えても、全児童一斉服用が最も望ましいことであろうと考えます。このことは学校給食の一環として取上げる必要があらうと思います。

未来に生き、未来を作る子どもたちのよりよい健康を願って、私達はあらゆる困難を克服して、よりよい施策をしたいと考えておりますが、その第一に「骨の強い子」に育てなければならぬと思います。

全児童一人残らず、学校給食の一環として肝油を服用することによってビタミンA、C、Dを充分にとり「骨の強い子」になることができたなら、まことに幸せであらうと明かす希望を持つものであります。



## 体位の向上, 体質の改善は 学校給食から

宇都宮市桜小学校

養護教諭 宇賀神 マス

日本人の体位問題は、東京オリンピック以来大きく脚光を浴びてきたが、次代の国民の体格づくりは、現在の大人に課せられた任務ではなかろうか。この問題について学校給食の立場から私見を述べてみよう。

### 1. 地域の食生活の実態調査とその考察

日本国民の体位の向上、体質の改善は、合理的な食生活によってはじめて実現する。

次に本校の地域の児童の食生活の実態について述べてみよう。

この調査は文部省で実施した方法と同一の方法で、本校の1年から6年までの中から1クラスを抽出して調査したものである。

すなわち、昭和39年6月15、16、17日の3日間、家庭において、児童が摂取した食べ物を全部記入し栄養価を算出したものが図表1および2である。

#### (1) その考察

- カロリーは、低学年、高学年ともに家庭において所要量の約2/3をとっている。
- 蛋白質、脂肪は、所要量の80%以上をとっている。特に動蛋白は、蛋白摂取量の1/3を上まわり、わりいあよくとれている。
- カルシウムおよびビタミンAの不足が目だっている。一日の中で特に夕食は、カルシウムの摂取が少ない。
- ビタミンAは45%以下、特に高学年の男子は30%をわずかに越した程度である。
- ビタミンB<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>の摂取についても問題がある。

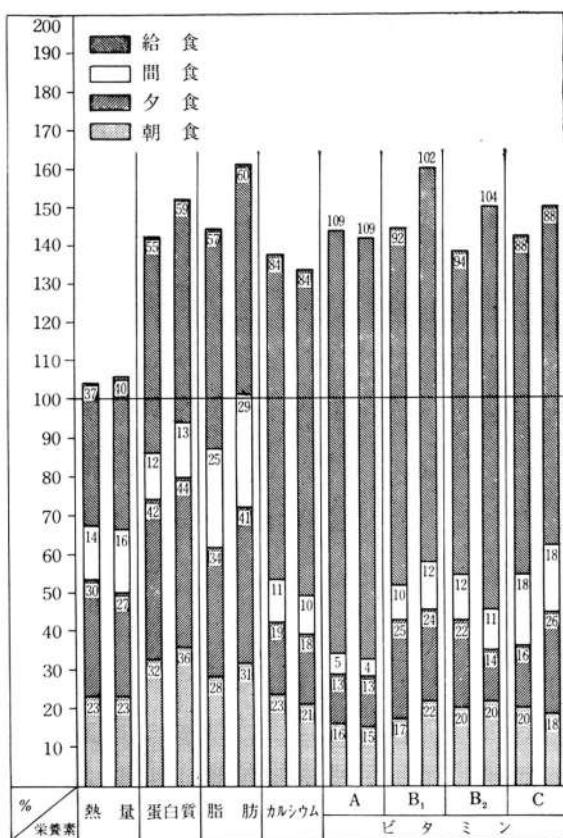
こうして考察すると、栄養を摂取させようとする様子は伺われるが、その与え方に問題がある。栄養のバランスが取れていないからである。

カロリーについては、残りの1/3は、弁当で補うこともできるが、カルシウムを初めとして、微量栄養素の摂取は、児童各自の弁当では所要量を満たすことは到底できない。図表1および2でもわかるように、学校給食において、それを補

っているのである。1年に200回完全な栄養摂取を行なっている。学校給食がいかに重要であるか論をまたない。

特に家庭の栄養摂取においていちじるしく不足のめだっているカルシウムは、脱脂粉乳の完全飲用により、338mg

図表1 年令別栄養所要量と比較した本校児童の食事の状況(低学年) 6. 7. 8 歳



厚生省で示した昭和45年度を目途としての6. 7. 8 歳児童の所要量を100とした。

学校給食の基準量の大半を摂取しているのである。また、ビタミンAは、くふうされた献立、あるいは強化食品により所要量をはるかに上まわってとることができるのである。

2. 学校給食の重要性和児童の体格づくり

学校給食が、児童の身体の健全な発育に貢献していることが、前述の調査で明らかになった。

学校給食は、人間一生の生活に関係する食生活の指導である。児童が、毎日の献立を通し食品の組み合わせや、栄養価の高い食事の大切なことを知り、将来合理的な食生活を行ない、各自の健康の増進を図るようになったなら、必ず日本人の体位は向上し、体質は改善され、世界各国の人々に伍して恥ずかしくない国民となるであろう。

(1) 栄養のバランスのとれた学校給食

本校では、文部省で示した学校給食の基準量をもとに、栄

養のバランスを考え、副食は二品料理または、添加物をつけ、おいしくて栄養たっぷりの給食を実施している。これが前記の地域の調査の家庭における栄養摂取のアンバランスを補っている。

このことは児童の健康増進に大きな役割を果たしていることは明確である。

(2) 学校給食をとおして正しい食事の理解と栄養の改善を

本校では、次に示すように、学校給食の年間計画を、習慣形式と栄養指導の二つの柱として、学校給食をとおして、食事についての正しい理解を得させ、望ましい習慣を養い、さらに毎日の献立をとおして栄養指導をほり下げようとしている。

すなわち低学年では、三色運動による栄養指導を、高学年では六つの基礎食品による栄養指導を、その日の献立をとおして行なっている。

- ① なんでもすき嫌になく食べるように。
- ② 食事は、いつも三色の仲間、または、六つの基礎食品の仲間が含まれているのがよい。
- ③ 一つの栄養素でも不足するといろいろな病気をひきおこす。
- ④ 栄養のバランスのとれた食生活が、健康な体をつくるのに必要なことなどをくり返しくり返し、献立をとおして具体的に指導をする。
- ⑤ 6年を卒業するときには、合理的な食生活の重要なことがわかり、進んで栄養のバランスの取れた食生活をするようになる。

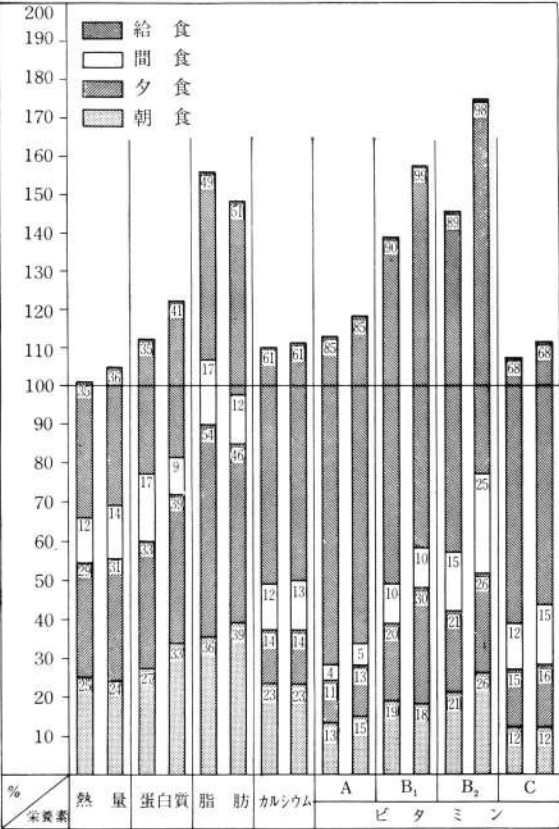
3. む す び

本校では、学校給食の教育的意義を考え、給食の指導を学校教育の重要な目標の中に取り上げ、学校給食をとおして地域の食生活の改善につとめてきた。また、この道の権威者をたびたび招いて、食生活に対する講演会を催した。そのため地域の各家庭においても食生活の重要性を認識し毎日の食生活に対して相当留意している様子が伺われる。

すなわち、土曜日の児童の弁当によってもそのことがわかる。牛乳、パンなどという弁当の児童はほとんどなく、その場合はほかに果物をつけたり、別に副食をつめた器を持参している。ご飯の副食についても、卵焼きだけなどという児童はほとんどなく、3種類は必ず詰め合わせている。

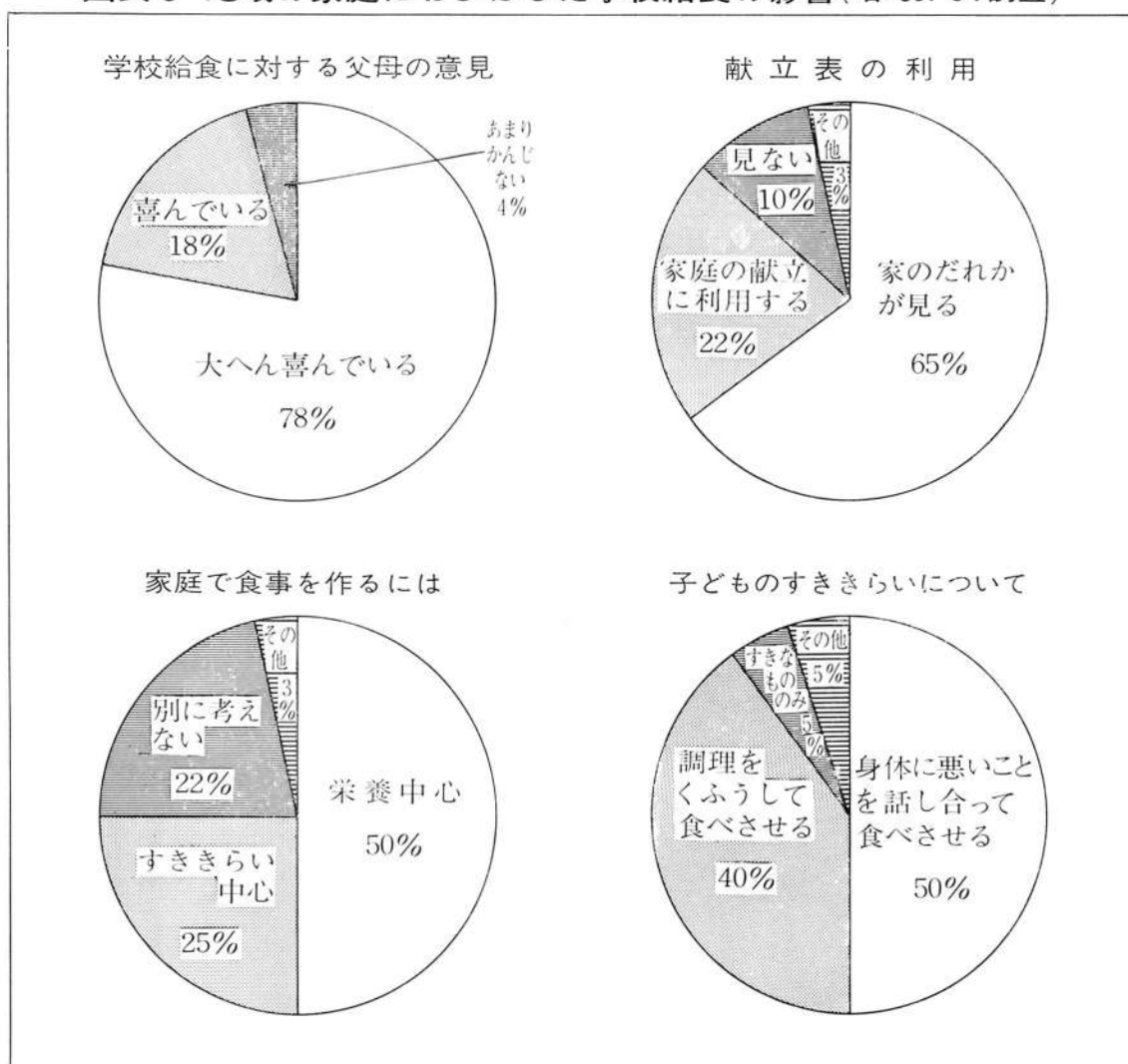
このように家庭で注意していても、どんな食品にどんな栄養素をふくんでいるのか、また、どの程度の栄養量を摂取すべきかなどの理解が、足りないもので、家庭では合理的な栄養の摂取がむずかしいのではなからうか。それゆえ、学校給食を通して栄養指導もほり下げ、国民1人1人が食生活の重要性を認識し、健康を増進するように指導すべきである。

図表2 年令別栄養所要量と比較した本校児童の食事の状況（高学年）9.10.11歳



厚生省で示した昭和45年度を目途としての9.10.11歳児童の所要量を100とした。

図表 3 地域の家庭におよぼした学校給食の影響(昭. 39. 9. 調査)



本校では、ビタミンA、Dの摂取をよくするため肝油を毎日一粒ずつ休み時間に与えている。そのためか冬のかぜひきも大分少なかった。

また、本年度は1,156名の児童中回虫卵の保有者は、わずかに1名であった。これは学校、家庭が協力して、いろいろな角度から児童の健康増進をはかったためである。

児童の偏食も教師、児童、家庭が一体になって努力すれば、学校給食をとおして必ず矯正できる。本校では、白ネズミの飼育によりそれを実現した。(紙面の都合でくわしく記すことができないが、また機会があったら述べてみたい)

最後に学校給食の重要性を考え、一日も早く、小・中学校の完全給食実施を祈りつつ筆をおく。

### あ と が き

健康優良校、優良児の記事が恒例化しました。読者層からの好評と要望に応えるためであります。

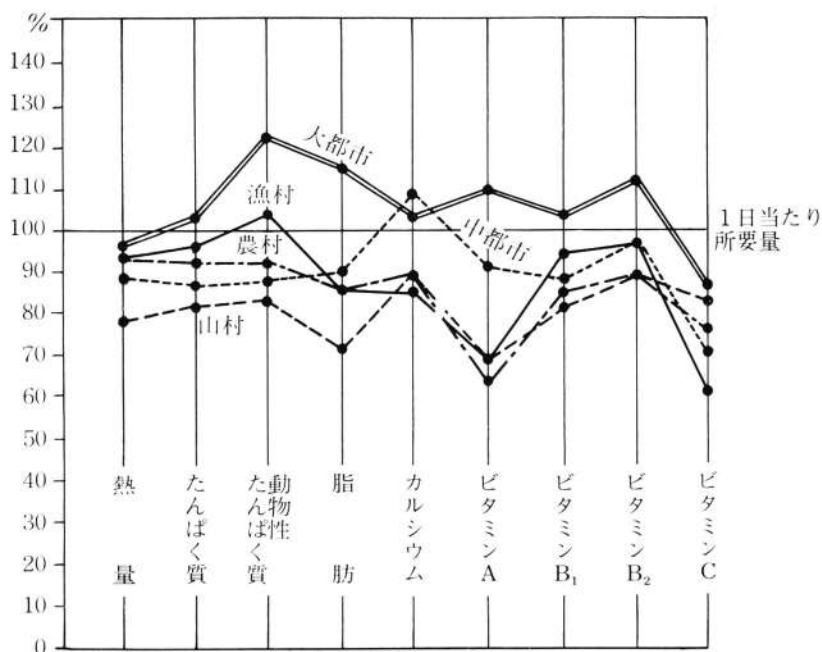
謹んで敬・祝意を表するとともに、ご多忙中尊い足跡をご寄稿くださいましたことに対し厚く御礼申しあげます。

実践記録、研究調査等をお寄せくださいました先生方に御礼申しあげますとともに、紙面の都合で、心血を注がれました図表、統計などを割愛させていただきましたことを深くお詫び申しあげます。(係)



## 地域別栄養摂取状況

(5年生 男・女1人1日当たり平均摂取量の比較) (昭和37~38年)



(注) ビタミン類については、調理等の際における損耗を差し引いたものについて示す。(文部省体育局調べ)

## 学童の健康づくりに！

品質本位の保健栄養剤

給食強化剤

カワイ肝油ドロップ3号

1粒中 ビタミンA 3,000国際単位  
ビタミンD<sub>2</sub> 300国際単位

アドリッチ

1g中 ビタミンA 50,000国際単位  
ビタミンD<sub>2</sub> 5,000国際単位



その他ビタミンB含有のカワイ肝油ドロップB、ビタミンC含有のカワイ肝油ドロップCもあります

製造発売元 河合製薬株式会社

東京都中野区新井2丁目51-8

## “ママの質問箱”

- ★愛育研究所保健指導部長  
医学博士 松島富之助先生
- ★お茶の水女子大学教授  
医学博士 平井信義先生

これは河合製薬提供のラジオ番組で、毎日毎日お家庭のお母さん方が、心をいためるお子さんの病気や教育、あるいはしつけなどについて、左記の両先生が親切にお答えくださいます。ご利用ください。

## 【各局の放送時間】

|                 |              |
|-----------------|--------------|
| ニッポン放送 毎日(但休日曜) | 九州朝日放送 (北九州) |
| (東京) 9時15分から    | ラジオ中国 (広島)   |
| 東海ラジオ放送 (名古屋)   | 東北放送 (仙台)    |
| 〃 9時45分から       | 〃 9時25分から    |
| ラジオ大阪放送 (大阪)    | 〃 10時10分から   |
| 〃 11時35分から      |              |